



アート前橋のみなさんへ

ご無沙汰しております、三枝です。

3月までのレジデンスを終え、京都の自宅へ帰ってからの生活は、「東京を経由したから」という理由で、きっちり2週間の自宅待機を命じられ、ようやく仕事に復帰できるかできないかのところで、今度は緊急事態宣言で、外出自粛の日々を過ごしました。

前橋滞在中、私はある事実を知りました。それは、関東大震災下に朝鮮人虐殺の現場となった場所の1つが、自身の生まれ育った町の、公民館前の芋畑で、盆踊り・運動会・夏のラジオ体操で日々訪れていた場所だったということです。犠牲者の墓はよく知る寺の一角にありました。

埼玉でも群馬でも、「朝鮮人」の話をするのを拒まれている感じがあって、ちゃんと調べたり考えたりし始めたのは、京都に帰ってからでした。差別や流言について意識しないでいられない今の生活の中で、この感覚が自分の中から消えないうちに、彼らの見た風景を自分の目で確かめたいと思い、無理を言って仕事を休み、5/25に再度関東へ向かうことにしました。出発の少し前から報道がありましたが、その日、新型コロナウイルス感染症流行に伴う緊急事態宣言が日本各地で全面解除されることになりました。東京駅そばのコンビニでの支払い時、ICOCAを使うと実際に差別的な物言いをされるとわかり、どこからきたのかを隠しながら過ごさなければなりませんでした。

翌日5/26に12時間かけて、およそ50kmの道のりを歩きました。これは、関東大震災直後に保護・収容された朝鮮人が徒歩で「町送り」されたという旧中山道のルートです。蕨から出発し、ほとんど休みなく彼らは30時間かけて熊谷にたどり着いたというので（抵抗することなく歩いてきた人々もここで暴徒化した自警団に殺された）、それにならって熊谷まで、休みなく歩きました。

腹と背にカメラと取り付け、撮影しながらの歩行でした。彼らの歩いた道のりを実寸大でトレースすることによって初めてこの問題に向き合えると考えてのことでした。限界を超えた身体にとっての嗅ぐことや聴くことの辛さ、逆に見ることへの変わらない信頼感が自分自身への発見として、印象に残っています。

この手紙に添えてお送りした写真は、鴻巣を過ぎたあたりの道端で出会った馬頭観音です。割れた石に足だけが残るこの馬頭観音に、私は励まされました。



「町送り」の本来の目的地は、はっきりとわかっていませんが、前橋刑務所に向かっていたとの説があります。今、前橋にはたくさんの「アジール」があるということを知って、もしも彼らが生きてその目的地にたどり着けたなら、なんとかその後の人生を立て直すことができたのではないかと、そんな気がしてなりません。

アーツ前橋がまもなく再開されるとのお知らせは聞いていましたが、休みなく歩いた私の足はもう立っていることもできないくらい弱ってしまい、ご連絡もせずに帰ってきてしまいました。すみません。

3月の休館時に行った「搬出を一旦保留する」行為は、5月まで続いたそうですね。共に行動することを選んでくれた作品を残して帰ることが名残惜しく、私はあの時、箒をこっそり置いて帰ったのですが、全ての作品が各々の場所へ帰っていった現在、箒は収蔵庫で預かってくださっていると聞き、嬉しく思っています。

私は自分の目と手と足、身体とその延長としての筆・刷毛・箒といったもので「触れる」ことによって知覚できる情報を信じているのだと思います。その意味で、多くの経験を失った数ヶ月でした。

9月にもう一度、今回たどり着けなかった前橋を目指して、「町送り」のその先へ旅をしようと考えています。

箒を迎えに行きますね。

2020年6月8日

三枝愛